The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソンにおける時間の一側面について : 時間が「働く」ということおよび自由
Author(s)	平野, 一比古
Citation	メタフュシカ. 2010, 41, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4481
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルクソンにおける時間の一側面について
──時間が「働く」ということおよび自由──

平野　一比古

1　はじめに

ベルクソンには、時間が何かの作用や効果を持つ、働くという時間についての捉え方がある。この捉え方は、『試論』以前のごく初期にも、また『試論』以降の主要な諸著作にも見られる。時間に対するこういう見方が、ベルクソンの思考に一貫しているのである。本論考は、「すべてが一挙に与えられることを妨げる」[1]「働き」を持つ時間を「働く」時間と呼び、その時間がベルクソン哲学において持つ意味について、検討を試みようとするものである。予め結論の概要を記せば、次の通りである。

1. 「働く」時間の発想が、ベルクソンの哲学の「出発点」であると確認できる。「働く」時間という発想が、ベルクソンの「持続」の観念の成立に至る道のりの初めにあったと言えるだろう。
2. 「働く」時間は、時間のあり方から、ベルクソンの哲学の特徴である、創造、新しさ、自由を根拠付ける。この時間の捉え方は、現代でも自由についての強い論拠となるのではないだろうか。
3. ベルクソンの哲学は、「働く」時間が一つの根底としてあり、その時間の中で実在、例えば意識を相互浸透として、ベルクソンの意味で直観する哲学と見ることが出来るのではないか。「働く」時間の発想は、ベルクソンの思考において、一つの根底的なものと言えるのではないか。

主な論点は、以上の通りである。本論考は、「働く」時間という呼び方をそこからとった、「可能的なものと実在的なもの」[2]（以下、PER と略す。）の一節から始める（第 2 節(1)項）。次に、第 2 節(2)項で、ベルクソン自身が「出発点」と言うベルクソンの哲学のごく初期の段階において、

---

[1] H. Bergson, *Oeuvres,* Édition du centenaire, P. U. F., 1959, p.1333. 以後、ページ数は、この 1959 年版のページを示す。（以下、同じ）

[2] « le possible」» と « le réel » については、本論考では、それぞれ「可能的なもの」、「実在的なもの」という訳語を当てている。なお、ベルクソンの著作に関し、各種邦訳を適宜参照しているが、本論考は必ずしもそれによらない。

ベルクソンがどう考えていたか、「働く」時間が「出発点」で確かにあったと言えるかどうか、諸資料をその観点から吟味する。第2節(3)項では、「働く」時間がどう自由を根拠付けるかを見る。第3節では、「出発点」の後、諸検討を経て成立したと考えられる「持続」の観念と、「働く」時間との関係について考察し、第4節では、「働く」時間とベルクソンの直観との関係について検討を試みる。

2　ベルクソン哲学の「出発点」と「働く」時間

(1)「働く」時間

ベルクソンは時間を「働く」ものと考えている。例えば、「可能的なものと実在的なもの」の中で、こう述べる。数学的法則により予測できる世界は、「映画のフィルムの上に並置された展開前のイメージ」のようになっている。そこでは、ある瞬間にすべての時間の状態が既に得られている。だから、時間経過は、それらの状態にとって何の役にも立っていない。「しかし、時間は何ものかである。」それゆえ、「時間は働く（agit)」。その「働き」とは、「すべてが一挙に与えられることを妨げる」「働き」であり、不決定だと言うのである。こういう時間を、本論考では、「働く」時間と呼びたいのである。そして、ベルクソンは、これが「私の考察の出発点」[3]であり、こう考えたのは、およそ50年前のことだと言うのである。1889年に発表された『試論』に先行する1880年代初め頃のことになる。

ここで注目に値する点は、第一に、ベルクソンの考察の「出発点」が「働く」時間であると明確に言われている点である。第二に、数学的な予測における時間は時間であるとは言えないという否定的な問題意識が、「働く」時間の基にあるということである。第三に、映画のフィルムのイメージによって、世界が時間経過なしに決定されてしまっているという奇妙さが明確に示されている。第四に、予測における時間を否定するところから直ちに、自由が導かれる。「働く」時間が、それだけで決定論を否定してしまうのである。決定論が強い力を持つ現代においても、「働く」時間は非決定論的な自由の有力な論拠と言えるのではないだろうか。

(2)　ベルクソン哲学の「出発点」

ベルクソン自身が、「出発点」という言葉を使って自らの思考の歩みを語る資料は、PERも含めれば三つあり、他にも出発の時点での転機を伺わせるものがある。『試論』も用い、「働く」時間の観点から、「出発点」の状況[4]を探ることにしたい。『試論』は1889年に発刊されており、PERでいう「出発点」とは、もう言えない時期である。ただ、『試論』第二章、第三章の第一稿が書かれるのは、1884-1886年[5]であり、「出発点」の時期は、諸資料からやや幅を広く取って1881-1884年頃と推定されるので、そうすると『試論』の第一稿は、「出発点」に接して書かれ

3　p.1333.

4　M1417およびM1148では、ベルクソンは、持続あるいは相互的な浸透の多数性の表象が、そこから出発し、そこに戻るところだと述べる。ここでは、「持続」の観念の成立以前での「出発点」を探ろうとしている。Mは*Mélanges,* P. U. F., 1972のページを示す。

5　M657では、『試論』が練られ書かれる時期は1883-1887年と述べられている。

ている。『試論』から、「出発点」との関連を読み取ることも出来るかもしれない。（事実、すぐあとで示すように、「働く」時間を、そこに見ることが出来るのである。）諸資料は、いずれも『試論』の成立後のものである。手紙の場合などでは、恐らく説明の容易さもあり、よく知られた「持続」という言葉を使って、時間の「働き」を示していると思われる資料もある。諸資料を総合的に見ると、「出発点」に「働く」時間があるという PER の記述に疑義を呈するものはない。なお、「持続」と「働く」時間との関係は、「働く」時間が「持続」の観念の成立の出発点であり、前提であり、根底であるという関係にある。「持続」とは、意識諸状態の相互浸透という時間的あり方である。「持続」の観念においては、意識諸状態のあり方と、時間的あり方とは切り離すことができず一体化している。ただ、「持続」の観念の時間的あり方に注目するとき、「持続」は、「働く」時間と同じであると見てよいと思われる（第 3 節(1)参照)。

本項で言う諸資料とは、① PER、② 1922 年 2 月にベルクソンを訪問した、デュ・ボスの書き留めた日記[6]、③ 1908 年に W・ジェームズへあてた手紙[7]（以上には「出発点」という言葉が使われている)、④ 1903 年のパピーニ宛の手紙[8]、⑤『試論』である。よく知られている資料なので、要点のみを記す。

1. 「出発点」の時期は、1881-1884 年と推定される。（①②③による。）

①によれば、既に触れたが、「出発点」は 1880 年代の初めになる。②では、1883-1884 年に最も関心を引かれたのは、力学的数学的概念だったと言われており、どんな別のものがあるとも分からない非常にあいまいな状態で、（力学的時間とは）「別のものがある」とベルクソンが理解するのは、その頃のことと推定できる。③では、1881-1883 年の間に考え方の変化があり、科学的な時間は「持続し」ないことに気づいたと言い、そのことが、「一連の反省の出発点」だったと言っている。以上から、三つの資料の時期を含む 1881-1884 年頃を「出発点」の時期として、本論考では仮に考える。

2. 力学や物理学における時間概念を検討する中で転機があり、意識における時間は科学的な時間とは別ものであることに気づいたとしている点は、驚くほど諸資料で一貫している。（①②③④による。）

①については既に(1)項で述べ、②③についても、1 で述べた。④については、博士論文のために力学の根本的な概念を研究しようとし、時間の概念の研究に専念するようになり、力学や物理学で語られる「時間」は、「持続」とは「全く別のもの」であることに気づいたと言う。

3. 意識における時間が科学的な時間とは「別のものである」というところから、さらに進んで、意識における時間が「働く」時間であると考えられるようになることは、三つの資料により確認できる。（①③⑤による。）ただし、③と⑤については、そこで使われる「持続」という語は、意識諸状態の相互浸透という時間的あり方と考えられるが、意識諸状態のあり方という意味合いとしてよりも、時間的あり方に注目されて用いられており、つまりは、本論考で言う時間の

---

6 Du Bos, Charles, *Journal 1920-1925,* Buchet/Chastel, 2003, p.129-137. および p.1541-1543.

7 M765-766 および C199-200。C は *Correspondances,* P. U. F., 2002 のページを示す。

8 M604 および C90-93

「働き」に注目して使われていると見ている（第 3 節(1)参照)。

①については、第 1 節で触れた。③では、科学的時間は「持続」しない、実証科学は本質的に「持続」の除去に存すると言われており、意識における時間は「持続」であると考えられている。⑤では、時間は、「利得（gain)」[9]だと言われ、時間の作用や「持続」の蓄積が考えられており、時間の「働き」が考えられている。以上から、①③⑤においては、少なくとも意識においては時間の「働き」が考えられていると思われる。

4. 科学的な時間について、そこでは、瞬間においてすべての状態が展開されているという形での批判は、①と③[10] に見られる。その意味での映画のフィルムのイメージが援用されるのは、1907 年の『創造的進化』以降であり、①の他、1922 年の「緒論」にも、見られるという時期的特徴がある[11]。

(3) 「働く」時間と自由

本項では、「働く」時間とベルクソンの自由との関係に限って述べる。ベルクソンの自由論の全体は、当然、このわずかな部分で述べることは出来ない。[12]

おそらく 17 世紀以降、物質が法則による決定論に従うことが明らかになって以来、物質の必然性との関連で、人間は自由と言えるのかということが問題になってきた。自由を語る場合、自由を認めない立場を除けば、決定論を認めかつ自由が成立すると考える両立説と、非決定論的な自由論を取る立場の二つに大きく分けることが恐らく出来る。量子力学の不確定性原理をもとに、これまで決定論的であると考えられてきた科学的法則の中で、古典的な決定論とは異なる確率的な法則から、自由の根拠を探る方向もある。ところで、非決定論は、精神は決定論的でないと考えるのだから、物質と、決定論に従わない精神との二つを立てることになる。精神と物質とは違うという議論は、精神は自由だと直ちに言っていることになるわけだから、自由を擁護する議論として一つの明確な議論の立て方だろう。ただ、そういう違いが簡単に言えるなら、もともと自由は問題にはならないであろうし、精神と物質という二つの実在を区別すると、直ちに両者が、どういう関係にあるかを問われることになり、それは簡単には説明できるものではないことから、非決定論は形勢がよくないだろう。

ところで、ベルクソンの立場も、少なくとも「出発点」では、意識は物質とは違うと捉えることによって自由を考えるものであった。ただ、ベルクソンの場合、物理的な予測に現れる時間と、意識における時間は違うというように、時間の違いから出発する。意識における時間は、物理的予測におけるような時間ではないと、意識においても物理的時間と同じように時間を捉える傾向を否定するのである。そうすると、生命や意識における時間では、将来は決定されていないこと

---

9 p.102.

10 M766

11 p.782., M766, p.1259., p1333. など。このことは、第 3 節(2)a で述べる、「働く」時間の「働き」の意味の時期的特徴と関連があるように思われる。

12 本項では、主として、「働く」時間と自由の関係が語られる PER の叙述によって、自由を考察する。

になり、予測できない[13]という意味でそこには新しいものがあり、新しいものがあるから創造があると言い得る。そして、創造があるから自由があるということになる。意識の時間は、科学的予測における時間ではないとする発想から、端的に自由が導かれる。簡単で明快であるからこそ、自由の論拠として強さを持つ。「働く」時間は、自由を強く、明確に支えるのである。

これについて、三つほどのことを言わねばならない。第一は、「働く」時間の発想から直接的に導かれる結論は、あくまで不決定ということである。法則的な予測における時間ではないのだから、その時間では、予測という形での決定がないと言えることは明らかである。ただ、不決定には、偶然の場合も含まれており、「働く」時間の発想だけからでは、偶然ではなく自由だと積極的に主張することは出来ない。しかし、この議論が自由に道を開くとは言える。第二に、「働く」時間とは、ベルクソンも「働く」時間を「創造の乗り物」[14]と言うとおり、その時間の中で創造が生まれうる時間であるということにしかならない。どんな自由な意識が、言わば時間としての「乗り物」に乗っているかは、実際に意識自身によって把握しなければ分からない。このことは、「働く」時間の発想を得たのちは、そこにとどまるわけには行かず、意識の自由な行為のただ中で意識による意識の把握に向かわなければならないという方向性を示唆している。ベルクソンが、初期に科学の研究の中で時間の観念にぶつかり、その後、「それまで関心をもたずにいた内的生活の領域に入っていった。」[15]というのは、こういう事情によるのではないか。第三に、いま触れたとおり、「働く」時間という発想は、導きの糸、方向性としても考えられる。「働く」時間の発想にとどまる訳には行かず、「働く」時間の中で、実在する意識を、さらには生命進化を考えることが促されるからである。少なくとも、ベルクソンはそういう方向に進んだと考えられるのである。

３　「働く」時間と「持続」

(1)　「働く」時間と「持続」との関係[16]

『試論』に基づき、「持続」とは意識諸状態の相互浸透という時間的あり方のことであると言って、ほぼ間違いない。「持続」が時間的なものであるのは科学で考えられている等質的時間と

---

[13] 「予測不可能性」は、カオス力学系の特徴として語られることがある。ベルクソンの予測不可能性とは、計算不可能性ということでもあり、カオス力学系で語られる、わずかな初期条件のずれが結果に大幅な相違を与え予測できないとする「予測不可能性」の意味とは異なると思われる。（カオス力学系においても、有限精度の初期条件を与えれば、有限時間、有限精度の軌道の計算結果は得られるようである。）決定論的法則に基づくカオス力学系の「予測不可能性」の存在は、計算不可能性から非決定論を導くベルクソンの議論に、少なくともこの観点からは影響を与えることはないように思われる。

[14] p.1333.

[15] p.1255.

[16] 「持続」の観念の成立を検討するということなら、とくに相互浸透という観念の由来を考えるためには、単に「働く」時間だけではなく、ゼノンの逆理の検討、さらに連合心理学に対する批判との関係の吟味が必要であろう。ここでは、そういった検討以前の問題として、特に「働く」時間との関係を考察している。（なお、ゼノンの逆理に関連して、デゼイマールがエレア派の論証についての講義の終わりに持続の直観がやってきたと述べている点については、ベルクソン自身はやや否定的である。（注 6 参照）グイエは、デゼイマールとベルクソンの間の、この捉え方の違いについて触れている。（Gouhier, H., *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale,* Vrin, 1989, p.23.））

の相違が語られることからも明らかだろう。そうすると、ここで「働く」時間と呼んでいる時間と「持続」とはどういう関係にあるかを、幾分でも明らかにする必要が出てくる。「持続」に含まれる時間と「働く」時間とは、同じものであるとしてきたが、どうしてそういえるのか。なぜ、「持続」とは別に、「働く」時間に注目することが重要と考えられるのか。こういった点について、いくつか述べてみたい。

第一に、「持続」が時間的な観念であるとして、そこにある時間そのものとは、どういうものなのだろうか。そもそも時間そのものということが、ベルクソンの「持続」に関して考えられ得るものだろうか。物理的な時間が、例えば、空間的における直線上の点として考えられるのとは異なり、「持続」おける時間は、空間的なものではなく、意識諸状態の相互浸透そのものの中に含まれているとしか言いようがなさそうである。ただ、『持続と同時性』[17] において、ベルクソンがメロディを例示として、音の諸性格をなくし、分離のない継続のみを保持することで、基本的時間を見出せるだろうと、断定ではなく条件法で語るところがある。そういう仮定的操作が行いうるとしたら見出される時間が、「持続」の観念における「働く」時間であろう。第二に、「持続」とは、第 2 節(3)で述べたように、「働く」時間の中での、意識諸状態の、意識自身による把握であると言うことが出来るだろう。「働く」時間の中で、それを前提にして、諸検討を経て意識諸状態の相互浸透という時間的あり方として、恐らく「持続」の観念が成立する。第三に、「持続」の観念における時間のあり方は「働く」時間であると見てよいと考えられる。「持続」の観念においては、意識諸状態が相互浸透するという意識諸状態のあり方と、時間的あり方とは切り離せず一体化している。一方、『試論』において、「持続」の観念には「痕跡」[18]、「蓄積」[19]、「利得」という時間の「働き」が含まれていることが確認できる。また、「働く」時間は、第二で述べたように持続の観念がその中で成立したと考えられる、言わば前提である。以上から、第 2 節(2)で触れたように、「持続」の観念の時間的あり方に注目するとき、「持続」における時間は「働く」時間と同じであると見てよいと考えられるのである。第四に「働く」時間が、実在の、そのただ中での捉えなおしを促したとすれば、「働く」時間は、そういう捉えなおしの基にあるとも言える。そして、時間の作用、効果については、第 3 節(2)項で見るように、主要著作で、そして最後の論集[20] でも、既に論じたような意味での「働く」時間は繰り返し語られる。「持続」という言葉が用いられる場面においても、しばしば、諸状態の相互浸透を強調するというより、むしろ時間の「働き」そのものが注目されて語られる。「働く」時間は、単に「出発点」におけるだけではなく、常に現在のものとして、ベルクソンの思考を展開させているのである。

このように見てくると、「働く」時間は、「出発点」であり、前提であり、促しであり、根底であり、一つの中心的なものと言えるだろう。「働く」時間が、「持続」とは別に考慮されてよいと考える所以である。他方、「働く」時間の中で、実際に実在の把握に成功したということから言

---

17 M98

18 p.70., p.101., p.131.

19 p.102.

20 PER のほか、「緒論」でも頻出する。また、M1149 参照。

えば、「持続」の観念の成立は、決定的に重要である。しかし、「持続」が成立するためには、「働く」時間の発想が、まず始めに必要だったことも軽視できないと思われる。

(2) 「働く」時間の広がり

a 「働く」時間の広がりの特徴

「働く」時間が、「働き」を持った時間として、あるいは「持続」に含まれる「働く」時間として、ベルクソンの思考を進める場面は、主要著作で見られる。各著作での「働く」時間の位置について詳細に検討することは今後に委ね、やや全体的な視点から三つの特徴的な点を述べることに留めたい。

第一点は、「働く」時間の、その「働き」の内容が著作の時期によって違うと思われることである。『試論』では、時間の「働き」は、既に述べたように、「蓄積」や「利得」と捉えられている。それに対し、『創造的進化』では、その「働き」とは、不決定であり、創造や予測できないもの、新しさを生む「働き」である。どちらも内容的には、時間の効果、「働き」のことであり、その効果が、科学的法則における時間の否定として考えられる点は各著作に共通なので、そこにある時間を「働く」時間と言いうることは間違いない。ただ、「働き」の色合いに差が認められるのである。第二に、この色合いの差は、時期によって最も問題とされる、科学的法則の違いによるのではないかということである。『試論』の時期では、時間の「働き」としての「蓄積」、「利得」に直接関係するのは、エネルギー保存法則である。諸点が元の位置に戻ったとき、状態まで元に戻ってしまうことになるのは、おかしい。時間経過は蓄積するはずだし、経過によって何かが得られているはずだとベルクソンは考えるのである。予測法則についての議論も出てくるが、時間経過の蓄積が意味を持たないことがおかしいと見る文脈の中でのことと思われる。それに対して『創造的進化』では、物理学は出来事を「展開されて空間化した時間の中にあるもののように考察する」[21] と言っているので、『試論』とは異なり、未来を予見する法則が知性の働きや機械論との関係で問題にされていると思われる。そこから、時間の「働き」としては、創造や発明、新しさを生むことと考えられている。第三に、その「働き」の違いは、自由の捉え方の違いとも関係しているように思われる。つまり、『試論』では、自由は主として「内的状態の外部へのあらわれ」として考えられている。自由な行為とは、過去の全体験に呼応する[22] とも考えられている。これは「蓄積」ということそのものだろう。言わば過去の全体験が、相互浸透しつつ現れること、蓄積としてあらわれることが、すなわち自由である。これに対して、『創造的進化』は、新しさや創造として自由[23] が考えられている[24]。

---

21 p.784.

22 p.112.

23 ユッソンは、ベルクソンの自由についての論文の結論部で、自由は予測不可能なものあるいは新しいものを創造する能力であると述べている。またその注で、自由な行為の予見不可能性が、「可能的なものと実在的なもの」についての仕事によって解明されていると記載している。(Husson, L., “Les aspects méconnus de la liberté bergsonienne”, in *Les études bergsoniennes vol. IV,* P. U. F., 1956, p.196.)

24 p.724.

b　主要著作での「働く」時間

以下に、主要諸著作で示される「働く」時間を、簡略に示す。

「働く（agir）」という言葉は『試論』でも、一度用いられている[25]。『試論』では、時間の「働き」が「蓄積」や「利得」として考えられていることについては、既に何度か触れた。そして、エネルギー保存法則との関係からだけではなく、因果関係の観点からも、時間が考察される。「デカルト的物理学やスピノザの形而上学、あるいは現代の科学理論」が「原因と結果との間に論理的な必然の関係を確定しよう」とし、「持続の作用を無に帰する」「傾向」[26] が問題にされる。

『創造的進化』では、一章、三章、四章において「働く」時間を見ることが出来る[27]。科学の分析、機械論や目的論の考察、あるいは形而上学についての考察から、それらにおいては、「すべてが与えられている」ことが問題であり、そのこととの対比で、時間の「働き」が語られる。あるいは、記憶によって、その「働き」が示される[28]。さて、『創造的進化』で示される時間の「働き」とは、第四章（「近代科学」（p.781-782））のところで示されるように、主として、不決定、新しさ、創造をもたらす「働き」である[29]。「映画のフィルムの上でのように、すべてが一挙に与えられていないのはなぜか」と問われ、未来は「予測不可能なものと新しいもの」を作ることが述べられている。

『道徳と宗教の二源泉』においては、第二章で『創造的進化』において論じられた「エラン・ヴィタル」の概念を再説する際、機械論と目的論では「未来は、現在から計算によって演繹されるか観念の形のもとで描かれ、時間はその結果、効果（efficace）はなく、生命の諸創造は予め決定されている」[30] と、批判されている。

『物質と記憶』においては、過去の時間の具体的な働き方を示すものが記憶と言える。「我々の過去は、逆に、もはや働かず（n'agit pas）、働きうるものであり、現在の感覚の中に挿入されることによって過去がその生命性を借りて働くようになる（agira）ものである。」（p.370）

４　「働く」時間の性格と直観

（1）「働く」時間の性格

「働く」時間の性格について、これまで述べたことをまとめる意味でも、四つの点について触れたい。

第一点目は、少なくとも数年に及ぶ科学的概念、特に時間の概念の検討がベルクソンの初期に行われていたことはよく知られていることだが、「働く」時間がそういう検討から出てきている

25　p.101.

26　p.137.

27　時間や「持続」の「働き」に関して、「効果的な作用」（p.508.）、「不可逆な働く持続（durée agissante）」（p.508.）、「持続の作用（action）」（p.519.）、「効果（efficace）」（p.527.）、「時間は無用（inutile）になる」（p.528.）「実在的に働く持続（durée réellement agissante）」（p.699.）、「効果的（efficace）な持続」（p.787.）、「効果的な作用（action efficace）」（p.801.）などと言われている。

28　p.508.

29　p.724.

30　p.1072.

ということである。「働く」時間という発想が出てきたのは、科学についての長い基礎的な検討があってのことであり、単なる思いつきではない。第二に、「働く」時間の発想は、否定的な意識から生まれているということである。それは、何がおかしいのかよく分からない状態の中で、しかし、ともかく何かがおかしいと意識せざるを得ないところから始まっている。そして、そこから、科学的時間の明確な否定に至る。第三に、「働く」時間の真偽についてである。こう述べているところがある。「時間（le Temps）は直接的に与えられている。それで十分である。そして、時間の非存在や時間の邪悪（perversité）が我々に示されるまでは、予測できない新しさの実際の湧出があることを、我々は単純に確認する。」[31] 物質、意識、生命などについて全人生をかけて行ってきた研究から、時間が「働く」ものとして与えられていることはベルクソンにとって揺るぎようがない。しかし「存在は経験のうちにしか与えられ得」[32] ないと考えるところから来ると思われるが、真偽は、今後の経験的探求に常に開かれているという留保を「働く」時間に対して、ベルクソンはここで行っていると思われる。第四点目は、既に第 3 節(1)で触れたように、ベルクソンの思考において、「働く」時間は、「出発点」であり、前提であり、そして根底的なものだということである。

(2) 直観

a 「働く」時間と直観

ところで、「働く」時間の発想の、①基礎的検討を要している②否定的意識から生まれる③誤りを認める④根底的であるという四つの性格は、ベルクソン的直観の持つ特徴でもある。直観とは、哲学的方法[33] であり、認識[34] であると言われる。精神による精神の内奥の、共感的認識と言える[35]。そして、直観は「持続」とは切り離せない。ベルクソンは直観の一つの基礎的な意味として、「直観的に考えるとは持続の中で考えることである。」[36] と言う。直観とは、「持続」の中での、「持続」の認識と考えていいように思われる。そして、特に創造や新しさとの関連では、「直観が、持続において、予測できない新しさの、絶え間のない連続を知覚する。」[37] というのである。直観の対象は、こういった記述からは精神や意識という実在である。「働く」時間とは直観の認識する対象における時間ということになるだろう。ところで、「働く」時間の発想そのものは、前項の最後に述べたように、単に時間にとどまらない発想である。つまり、「働く」時間の発想とは、実在の把握を促し、その把握の前提でもあり、実在の把握において根底的である。それは、「働く」時間の中にこそ真の実在はあるという発想である。こういう「働く」時間の発想は、実在についての直観的な発想と考えられるのではないだろうか。

---

31 p.1344.
32 p.1292.
33 p.1271.
34 p.1273.
35 p.1424., p.1432.
36 p.1275.
37 p.1275.

b 「働く」時間の発想と否定的な直観

さて、「働く」時間の発想は、科学的時間の意識における否定から導かれていた。ベルクソンは、直観について「一般に受け入れられている観念や、明らかであると思われる主張やそれまで科学的と見なされていた断言の前で「直観は哲学者の耳に不可能という語をささやく。」[38] と言う。そして、「漠然としていても、決定的な経験が、人が主張する事実や、人が与える理由は、その経験と両立不可能だ」と言い、「従って、事実は誤って観察されているに違いなく、これらの根拠は間違いに違いないと、哲学者に語る」と言うのである。ここでの否定的な直観についての考え方は、「私は、時間とは言われているところのものではあり得ない、別のものがあることが分かった。しかし、はっきりとは何であるかは分からなかった。」[39] という、力学に関わる「時間についての認められた観念」を検討していた「出発点」のベルクソンの経験と一致しているように思われる。まず、「一般に受け入れられている観念や、明らかであると思われる主張やそれまで科学的と見なされていた断言の前で」というところは、力学的な時間の検討の中で「出発点」が始まっていたことと照応する。第二に、「人が主張する事実や、人が与える理由は、その経験と両立不可能だ」というところは、「別のものがある」と考えるところとほとんど同じだろう。第三に、「出発点」の経験とは、確かに「漠然と」している。しかし、「別のものがある」ということについては、決定的である。「働く」時間という発想そのものは、ベルクソンの言う否定的な直観[40] から生まれていると考えてよいのではないだろうか。

c 原初的直観

ところで、ベルクソンは「学説を生む直観」[41] と言い、「哲学者がその力を汲む直観」[42] と言ったり、「原初的直観」[43] と言ったり、「体系がそこから降りてくる直観」と言ったりする。ある哲学の基には、そういう「学説を生む」「原初的直観」があると考えている。哲学者は、「自分の原初的な直観の単純さを増大する近似で与える」[44] 以外のことは出来ないとも考えている。ベルクソンにとって直観こそ、もっとも厳密なものである[45]。

ただ、直観が表現されるためには、概念とイメージを用いる以外に方法はないとも言う。そして、このうちイメージは、「具体的な直観の単純さとそれを翻訳する抽象概念の複雑さ」[46] の間にあって、概念的で必然的に記号的な表現よりも、はるかに直観に近いと考えられている。解釈者

---

38 p.1348. なお、デゼイマールは、エレア派の論証の講義の際に、ベルクソンは、この「不可能だ」という声をはっきりと聞いたのだろうと書いている。（Desaymard, Joseph, *La pensée de Henri Bergson,* Mercure de France, 1912, p.11-12 および *H. Bergson à Clermont-Ferrand,* Bellet, 1910, p.15.）（注 16 参照）

39 p.1541.

40 それまでに認められていた科学的時間を意識においては否定する直観は、一概に、反科学的で反知性的なのかどうか。ユッソンは、ベルクソンの哲学は、『道徳と宗教の二源泉』に用いられる言葉によって、「開かれた」知性主義だと言っている。（Husson, L., *L'Intellectualisme de Bergson,* P. U. F., 1947, p.225.）

41 p.1357.

42 p.1360.

43 p.1357.

44 p.1347.

45 p.1356.

46 p.1347.

は、原初的直観をあいまいな考えにしないためには、こういった中間的なイメージを復元しなければならない、とベルクソンは言うのである[47]。もっとも、哲学の解釈者が、直観に近いイメージに到達したとしても、同じイメージをその哲学者が持っていたかどうかは分からないし、ベルクソンもそのことを否定はしない。

「持続」は、ベルクソンの哲学にあって、中心的概念である。ただ、その観念の形成の前に時間は「働く」と捉える転機があり、それが意識の直接的把握を促した。「働く」時間の発想は、「持続」の観念の前提でもあり、意識を直接把握することへの促しでもあった。「持続」の観念が成立してからは、「働く」時間は、時間単独では「持続」から切り離し難く「持続」における時間としてある。そして、「持続」の観念における諸状態の相互浸透よりも、むしろ時間の「働き」がベルクソンの思考を展開させている場面が諸著作で引き続いて見られている。哲学を生み出す直観と、その直観に近いイメージを考える場合、「働く」時間という発想あるいは科学的時間の否定は、ベルクソンにおける根底的直観の一つのイメージとして考えられないだろうか。

5　おわりに

結論をまとめて本稿を終わる。

1. 「働く」時間がベルクソン哲学の「出発点」であるということは、諸資料と『試論』を吟味することによって、ほぼ確認できる。すなわち、ベルクソンに独自な哲学は、時間を「働く」ものとして捉えたことから始まると言える。
2. 「持続」の観念のもとには「働く」時間がある。「働く」時間は、「出発点」であり、前提であり、「働く」時間の中で「持続」が成立したと言える。「持続」として、すなわち意識の相互浸透として、実在を捉えるにいたったからこそ、「働く」時間の意義も重要になっている。「働く」時間は、単独では単に発想とでもいうべきものである。
3. 「働く」時間は、不決定を導く。すなわち、時間のあり方だけで、ベルクソンの哲学の特徴である、創造、新しさ、自由を根拠付ける。そして、この時間の捉え方は、現代でも自由を擁護する強い論拠となると考えられる。なお、「存在は経験のうちにしか与えられ得ない」と考えるところから、この「働く」時間についても、経験によって訂正されうる余地は否定できないものとしてベルクソンは考えていると思われた。
4. 「持続」は共感的認識である直観の対象であるが、「働く」時間はその直観のうちにある時間である。他方、時間が「働く」という「出発点」の発想そのものは、ベルクソンの哲学の根底的直観に近い、一つのイメージとも考えられる。

（ひらのかずひこ　現代思想文化学・博士後期課程）

[47] p.1355-1356.

Un aspect du temps chez Bergson
——le temps qui « agit » et la liberté——

Kazuhiko HIRANO

Bergson pense que le temps « agit ». C'est-à-dire que « le temps est ce qui empêche que tout soit donné tout d'un coup. » Nous appelons ce temps le temps « agissant » dans cet article. Ce temps apparaît au début de sa carrière, c'est-à-dire avant l'*Essai* et après l'*Essai* dans presque toutes ses oeuvres principales aussi. Dans cet article, nous essayons de démontrer quelques significations de cette notion de temps.

1. Nous pourrons dire que le temps « agissant » est le point de départ des réflexions de Bergson lors qu'on examine les documents concernés. En d'autres termes, sa philosophie commence par la notion que le temps « agit ».

2. C'est justement à partir de ce temps que Bergson aboutit à l'idée de « la durée ». En ce sens, ce temps est important.

3. Ce temps « agissant » entraîne l'indétermination. Autrement dit, le temps seul fonde nouveauté, création et liberté qui sont caractéristiques de la philosophie bergsonienne. Il soutient fortement la liberté humaine. Bergson croit à l'existence de ce temps. Cependant, il semble laisser ouverte la possibilité que la vérité de ce temps puisse être corrigée par les études futures sur l'expérience.

4. Le temps « agissant » est, en plus du point de départ, une sorte de prémisse, une sorte d'incitation à l'idée de « la durée » et fondamental dans sa philosophie. L'idée du temps « agissant » serait-elle une des images proches de l'intuition originelle de sa philosophie?

「キーワード」
時間、働き、自由、持続、直観